



Title	大学院重点化の波
Author(s)	柏木, 哲夫
Citation	臨床死生学年報. 2001, 6, p. 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8928
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大学院重点化の波

柏 木 哲 夫

大阪大学人間科学部は平成12年4月に大学院重点化が完成し、教育の対象の重点が学部生から、大学院生に移った。これは何も学部教育を軽く見るという意味ではなく、これまであまり充実していなかった大学院の教育を重点的に強化しようという目的を持つと私は理解している。重点化とともに我々の講座も大学院生が大幅に増えた。2001年度は院生が17名（後期課程6名、前期課程11名）、学部学生が15名（4年生8名、3年生7名）となり、院生が学部生を上回った。

大学院の重点化とともに教官の正式な肩書きも長く、かつ、複雑になった。因に私の正式な肩書きは「大阪大学大学院人間科学研究科人間行動学講座臨床死生学研究分野教授」となり、何と漢字が32続く。

教官の喜びの一つは、よくできた論文に接することである。特にすぐれた博士論文は将来の立派な研究者の姿をすでに垣間見る思いがしてうれしい。今年はそんな二つの論文に接した。一つは大和田攝子さんの「犯罪で子どもを亡くした遺族の心理と支援に関する研究」である。犯罪という特殊な状況での死別体験故に遺族が経験する課題は複雑である。難しい分析を見事になしとげた力は高く評価できる。もう一つは坂口幸弘君の「配偶者との死別後の適応とその関連要因に関する実証的研究」である。これはすでに発表（一部印刷中）された13の論文を中心に修正加筆された8部よりなる膨大なもので、読みごたえがあった。二つの論文とも公聴会で高い評価を受け、私に「良い発表でしたね」とのコメントをしてくれた教授がいて、とてもうれしかった。

人の動きに少し触れておきたい。2001年4月から上記の大和田さんは神戸の松蔭女学院大学の心理学の講師に、坂口君は日本学術振興会特別研究員として講座で研究を続けることになった。また後期課程の院生であった鈴木要子さんは滋賀医科大学看護学科の助手に採用された。そして、長年助手として頑張ってくださった山本恵子先生は聖母被昇天学院女子短期大学の心理学の助教授として新しい道を歩まれる。2001年10月1日付けで現在淀川キリスト教病院ホスピス長である恒藤 暁先生が助教授として赴任して下さることになった。

私は相変わらず、忙しくしている。大学の評議員は1年間の任期で2001年3月で辞めたが、新しく、「日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団」の理事長と、「アジア大平洋ホスピス緩和ケアネットワーク」の chairman を引き受けることになった。定年退官まであと2年を切った。それまでにいい論文をまとめてほしい。積み残したまま辞めるのは避けたいので。私もできるだけ、協力するつもりをしている。

2001年6月

教授室にて